

構造薬科学

—“分子”構造を見る、知る、操る

オーガナイザー

友重秀介(東北大院生命)
唐木文霞(北里大薬)

近年、配座固定やコンフォメーション変化の誘起など、低分子からペプチド、核酸、そして蛋白質に至る幅広い“分子”に対する立体構造の操作に立脚した生物活性分子の創製アプローチが増えつつある。こうした方法論は、生物活性分子の精密デザインや物性の微調整のほか、従来にならぬ生物活性や作用機序などの創出も可能とし、創薬の新たなパラダイムを拓くポテンシャルを秘めている。

本シンポジウムでは、多様な“分子”に対する構造操作(操る)に加え、立体構造と物性の相関解析(知る)や構造解析技術(見る)など構造操作の基盤となる研究も含め、独創的研究を展開する5人の研究者をシンポジストとしてお迎えし、その先進的な研究内容についてご講演いただく。薬学系のみならず、薬学会年会に初参加の異分野研究者まで多岐にわたるシンポジストが集まっており、分子の構造をキーワードにヘテロな集団からなる構造薬科学コミュニティの醸成を期待する。

(友重秀介)

実務家教員がつなく、

大学と医療現場の薬学教育と研究

オーガナイザー

平出誠(星薬大)
安武夫(明治薬大)

2022年度に改訂された薬学教育モデル・コア・カリキュラムでは、大学と医療現場がより一層連携して教育や研究を行うことが求められている。そのような状況下で、「臨床薬学」という教育体制の構築には、医療現場で活躍していた実務家教員の役割は重要であると考えられる。実務家教員は、概ね5年以上の薬剤師としての経験を有するものと定められており、単に実務実習や事前学習の指導だけでなく、それぞれの専門領域において教

育と研究に携わることが期待されている。

そのため、実務家教員は実務の現場を離れても、専門職能と研究能力の向上が必須であり、最先端の実務技能や知識の維持、向上に努めなければならない。質の高い薬剤師を輩出するためには、大学と医療現場の連携が必要不可欠である。

本シンポジウムでは、実務家教員による教育や研究について、医療現場と大学をつないで教育や研究の具体例を紹介し、実務家教員の薬剤師としての技能や知識の維持および向上の取り組みについて議論する場としたい。

(平出誠)

微粒子との環境共生研究 up-to-date 2024

オーガナイザー

齊藤達哉(阪大院薬)
堤康央(阪大院薬)

現代社会では、人類は様々な微粒子に囲まれながら生活を営んでいる。海洋中のマイクロ/ナノプラスチックや大気中のPM2.5・黄砂などの微粒子は、環境汚染物質として知られている。また、日々の生活で使用する工業製品・食品・化粧品などにも、微粒子が含まれている。これらの微粒子が人体に対して与える影響については十分に解明されておらず、微粒子の安全性・

毒性を正確に把握し、必要な対策を講じることは急務である。

本シンポジウムでは、環境中に存在する微粒子の成分・動態、微粒子の体内動態、微粒子の生体内感知機構、微粒子の生殖毒性・神経毒性・免疫毒性、微粒子毒性を緩和する手法、微粒子の安全性予測などに関する最新の研究の取り組みを、各演者が紹介する。人類と微粒子が共生する新時代に向けて、本シンポジウムが微粒子と健康の関係について理解を深め、これからの微粒子研究のビジョンを共有する場となれば幸いである。

(齊藤達哉)

中分子医薬および超分子DDSの

開発・評価とレギュレーションについて考える

オーガナイザー

川上茂(長崎大院医歯薬)
山本栄一(国立衛研)

近年、ペプチド医薬、核酸医薬や低分子や核酸医薬を内封する超分子集合体であるナノ粒子医薬など薬物送達システム(Drug Delivery System: DDS)を取り入れた医薬品の開発が行われている。しかし、これらは複雑な化学構造に基づく特徴的な特性を有しており、その研究開発には多様な技術的課題を伴う。これらの課題を克服する

ために、有効性・安全性・品質を確保するための新規技術の開発や技術の進展に即した適切な規制の調整(レギュレーション)が求められる。

本シンポジウムでは、産・官・学の演者により、人工核酸、環状ペプチド化学やPET(Positron Emission Tomography)体内動態解析法、レギュレーション評価に関する最新の知見を紹介する。本シンポジウムを通じて、今後の医薬品開発加速に向けた課題について情報共有し、その解決に向けた議論を行いたい。

(川上茂)

社会ニーズに対応した

先進的な薬学教育に係る取組

オーガナイザー

有澤光弘(阪大院薬)
平田収正(和医大薬)

本シンポジウムでは、大学院進学促進・薬剤師博士の養成と薬剤師の地域偏在解消について会員諸氏と深くかつ多角的に議論するため、文部科学省と厚生労働省から「薬学教育における当面する諸課題について」と「薬剤

師の偏在と確保対策について」と題した基調講演をそれぞれ行っていたいただき、現状と対策について情報共有したい。

続いて、大学から三つのトピックスを紹介いただく。一つ目は、「大学院進学促進・薬剤師博士の養成」に向けた取り組みの基礎データとなる国公立大学6年制薬学部卒業生の進路調査を紹介いただく。二つ目は、学部・大学

院における優れた研究能力の養成に向けて「薬学の強み“研究力”は薬剤師の明るい未来につながる」について紹介いただく。三つ目は、文科省「地域の医療ニーズに対応した先進的な薬学教育に係る取り組み支援事業」採択の国公立4大学の事業を紹介いただき、薬剤師地域偏在解消に向けた「地域医療を支える薬学部の役割」について未来志向で議論したい。

本シンポジウムは高度先導的薬剤師養成プログラムの企画によるものである。

(有澤光弘)

祝 日本薬学会 第144年会

(順不同)

Advertisement for the 144th Annual Meeting of the Japanese Pharmaceutical Society, featuring logos and contact information for various organizations including Zeria, Otsuka, KPIA, Japanese Pharmaceutical Association, Japanese Pharmaceutical Original Drug Industry Association, Japanese Pharmaceutical Research Center, and Japan Pharmaceutical Association.